

令和元年6月11日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02818

研究課題名(和文)中国話者から見たニア・ネイティブレベルを目指すための語彙に関する総合的研究

研究課題名(英文) Vocabulary Study of Senior Level Japanese Learners: From Chinese Speaker Perspective

研究代表者

劉志偉(LIU, Zhiwei)

埼玉大学・人文社会科学部研究科・准教授

研究者番号：00605173

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は日本語学習者(学習経験者)の視点から、ニア・ネイティブレベルを目指すためにはどのような語彙が必要なのかを明らかにすることを目的としたものである。具体的には以下の2点を中心に研究を進めた。(1)研究代表者自身が記録してきた学習メモ(12年分)を手がかりに学習者が求める語彙シラバスの一端を明らかにした。(2)ネイティブ教師による語彙リストと比較し、学習者からみて抜け落ちる点を明示した。なお、母語の違いに応じた日本語教育が必要である立場から、本研究は中国話者のための語彙を研究対象としている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

母語の違いに応じた日本語教育が必要である立場から、本研究は中国話者のための語彙を研究対象としている。本研究で得られた成果は、今後ネイティブ教師側に提供する予定である。ネイティブ教師側と共同研究で議論を重ね、将来的にはネイティブ教師側と学習者の両方の視点を反映した語彙シラバスを構築することにより日本語教育に寄与したい。

研究成果の概要(英文)： This study aims to make clear what vocabulary is necessary to aim at 'near native' level fluency from the standpoint of an experienced learner of the Japanese Language. It focuses on the below two points. 1. A partial vocabulary syllabus based on vocabulary notebooks that the experienced learner recorded over a 12 year period. 2. An analysis of what the learner sees as omissions through comparison with vocabulary lists produced by native teachers. Further, recognising that differentiation in Japanese Language education is required to respond to the mother tongue of the learner, the study considers appropriate vocabulary for speakers of Chinese. It is planned to offer the conclusions of this work to native teachers. Through further joint research and discussion with native teachers, it is hoped that this study will contribute to Japanese Language Education by enabling construction of vocabulary syllabi that reflect the perspectives of both learners and teachers.

研究分野：日本語教育

キーワード：語彙学習 ニア・ネイティブレベル 学習経験者 砂川データ

1. 研究開始当初の背景

本研究は、ニア・ネイティブレベルを目指すための語彙に関する研究である。ここでいうニア・ネイティブレベルを目指す学習者とは、上級（旧日本語能力試験1級または現行の日本語能力試験N1の合格者を目安とする）以上で、日本語の運用能力を日本語母語話者に極力近づけようとする学習者のことを指す。従って、ニア・ネイティブレベルは、OPIの超級やネイティブライクといった母語話者による受動的なランク付けにとどまることなく、学習者による能動的な学習過程の範囲をも指す。教育現場では、上級以上の日本語学習はほぼ学習者の独学に委ねている傾向が強く、指導不要論さえある。また、教材や参考資料も乏しい。教師側には更なる上のレベルを目指す意志のある学習者にシラバスを用意する責務があると思われるが、現状ではニア・ネイティブレベルを目指すための文法シラバスが存在しないほか（劉2015）、語彙シラバスに関する研究も少ない。語彙に限って言えば、最新の資料として藤田（2015）『上級・超級日本語学習者のための考える漢字・語彙』（超級編）が挙げられるが、従来型のネイティブ教師の経験論に基づく直感型の語彙用例集という域を出ていない。個々の語が学習者にとって本当に必要なのかが検証されない従来型の欠点を克服すべく、最近ではコーパスに基づく語彙シラバスを志向する研究が行われている。上級以上に特化した語彙リストではないが、上級用語彙を含む代表的な成果として参考資料1（山内2013）と参考資料2（砂川2015）が挙げられよう。ただし、客観的なデータに基づく語彙リストでも抜け落ちる可能性、換言すればコーパスのみでは見えてこない部分があると考えられる。この点を補うためには、学習者（とりわけ学習経験者）ならでの視点が必要となる。

2. 研究の目的

本研究の目的は日本語学習者（学習経験者）の視点から、ニア・ネイティブレベルを目指すためにはどのような語彙が必要なのかを明らかにすることにある。

- (1) 研究代表者自身が記録してきた学習メモ（12年分）を手がかりに学習者が求める語彙シラバスの一端を明らかにすること。
- (2) ネイティブ教師による語彙リストと比較し、学習者からみて抜け落ちる点を明示すること。

3. 研究の方法

本研究では、研究代表者が来日後、記し続けてきた学習メモをもとに、学習者にとって必要な語彙とは何かをまず明らかにした。学習メモは、中国語母語話者（男性）である研究代表者自身が大学院進学のために来日した2003年から就職後の2014年までの間、日常生活で出会った語彙を学習のために記したものである。このメモは研究代表者が20代半ばから30代にかけて、大学、アルバイト先、職場などで知人から受けたインプットだけでなく、TVや書籍類、広告や公共放送などあらゆる媒体を通して受けたインプットの中で、気になった語彙（未知語、学習難易語等）を幅広く収集したものである。続いてネイティブ教師によって作成された語彙リスト（砂川データ）と比較することにより、学習メモにある語彙との異同を明らかにした。その上で、ネイティブ教師の視点のみでは見落としがちな点を提示した。

さらに、学習メモとは別に、研究代表者自身の学習経験をもとに、ニア・ネイティブレベルを目指すため語彙学習に必要な視点等についても考察を行った。

4. 研究成果

研究代表者自身による日本語学習メモそのものに基づく考察と、学習者の語彙リストと母語話者によって作成された語彙リストの比較との二部構成で研究を進めてきた。

まずは学習メモを手がかりに語彙学習における学習者の視点と要望等を明らかにした。

(1)「学習経験者の視点から見た立体的な語彙学習について 中国語話者の個人学習メモを手がかりに」:意味学習を中心とした従来型の語彙リストでは、語の学習難易度でレベル分けされる場合が多い。しかし、研究代表者自らの学習経験から言えば、初中級の語彙であっても上級以上の学習者にとって全く問題がないわけではない。例えば、指示詞の「これ(2010:学習メモを取った年、以下同様)」について一般的には初級の語彙とされることが多く、難易度自体は低い語彙である。なぜこのような語彙が研究代表者の学習メモに含まれているかについて、学習メモを遡ってみると、レストランで注文する際に「こっち、お願いします」と発言し、友人に「こっち」ではなく、「これ」を使用するよう指摘されたとの記述が見られた。当時、筆者は話し言葉であれば「これ」を「こっち」に変換すべきだと誤解していたことから、学習メモには「1-3誤推測」というタグを付与している。同様に、初級の語彙とされる「イタリア(2006)」について、学習メモでは「2-1アクセント」というタグを付与している。これは、本来「低高高高」と発音すべきところを、筆者が中国語訳の「意大利」の声調の影響を受けて「高低低低」と発話していたことを指摘されたとの記述が見られた。このように、本論文では語彙を指導する際に、意味だけではなく用法やアクセント等の多方面を含む「立体的な語彙指導」を提唱している。

(2)「ニア・ネイティブレベルを目指すためのカタカナ語学習に関する一考察 中国語話者のケーススタディーを通して」:本論文は筆者自身が来日後、記し続けてきた学習メモを分析することにより、1つのケーススタディーとして中国語を母語とする日本語学習者にとってどのようなカタカナ語が難しいか、学習者が難しく感じる理由とは何かの2点について明らかにしようとしたものである。筆者による学習メモのうち、「語彙の形態的特徴により学習が困難な語彙」と「語彙の使用領域により学習が困難な語彙」の2つのブロックに区分された語を考察した結果、形容詞系列の抽象概念等については、カタカナ語の言い換えとして学習者が同義または類義の「漢字漢語語彙(または和語)を使いたがる心理」が働き、カタカナ語の学習を疎かにしている面があった。また、カタカナ語の(具体)名詞に関しては、学習者にとって苦手なカテゴリーが多く存在し、中でも圧倒的に「経験不足」によるものが多いことがわかった。

(3)「新しい日本語教育のアクセント学習において必要なもの 中国人日本語学習者の学習メモの分析から」:これまでのアクセント教育については日本語を指導する側からの論究がほとんどであり、日本語学習者による自らの経験を踏まえた上での論考がほぼ皆無であった。こうした現状に鑑みて、本論文では、日本語学習経験者である筆者による十数年の学習メモを手掛かりに、中国語を母語とする学習者の視点から、今後の日本語のアクセント学習において重要となるものについて私見を発表した。具体的には、アクセントの学習においてネイティブ教師の手助けを要する場合と学習者自身が中国語等からの影響を自覚する必要がある場合とに分けて、その概要が述べられている。

そして、日本語母語話者によって作成された砂川データと学習メモを比較し、日本語母語話者の指導指針と学習者の要望との間にずれがあることを論じた。

(4)「日本語学習者から見た語彙シラバス」(森篤嗣編『ニーズを踏まえた語彙シラバス』):研究代表者自身が記録してきた学習メモ(12年分)にあった語をExcelで入力し、年度別や語種等のタグ付け作業を行った。具体的にはこれらを、研究代表者が当時気になっていた個々の語に関する学習ポイントと、意味学習を中心とした語そのものとの二分し、そして「1学習者が間違えやすいポイント」「2学習者が自力ではなかなか知り得ない学習ポイント」「3語彙の形態的特徴により学習が困難な語彙」「4語彙の使用領域により学習が困難な語彙」「5その他(語彙学習そのものの学習ではない)」の5つのブロックを設けた上でさらに下位区分(具体的なカテゴリー)を行った。具体的な考察を通して学習者の視点(要望)とネイティブ教師側の視点(指導指針)との間に見られる種々の異同を明らかにした。以下、次の1例を挙げる

こととする。語彙学習において、上位語と下位語の関係についても考えなければならないからである。研究代表者は上位語が言えても下位語はなかなか産出できないことをしばしば経験してきた。例えば研究代表者は、パンやケーキなどの上位名詞については日本語を学習し始めた頃から教わってきたが、OPI テストで「超級」と認定された後もしばらくの間「エクレア」を「チョコレートでコーティングしたパン」で表していた。このような実体験を踏まえ、ここでは、上級学習者に対して、上位語に留まらず、オプションな下位語の指導が重要であることを主張したい。特に、こうした下位語は、語数が非常に多く、自然に習得するのは非効率的であると考えられる。ネイティブ教師の手助けが必要であることは学習者の切実な要望である。

なお、この論文では母語話者によって作成された語彙リスト砂川データとの比較しか行っておらず、予定していたもう一つの母語話者語彙リスト山内データとの比較を取りあげることができなかったが、今後の課題として研究を続けてゆく所存である。

このほか、実質語の考察に留まらず、研究代表者自身の学習者の経験を踏まえた上で、特に語彙と文法を連続性の視点から機能語等についてもいくつかの論考を発表した。

(5)「二格名詞句に関する一考察 日中対照研究の見地から」:日本語の格助詞(単独形)のうち、最も複雑な様相を呈するのは二格である。従来二格に関する研究及び指導においては、主に単独形の格助詞同士の使い分け【ことへ、ことデ、ことカラ(受身のマーカーを除く)、ことマデ、ことト】、単独の格助詞と複合辞の使い分け【ことニトツテ、ことニ対シテ】、二格とヲ格の選択【いわゆる自他選択の誤用関係の1つ】等に重きが置かれている。しかし、本論文で示したように、こうした使い分けのための違いを強調するだけではなく、逆にそれを学習に利用することも可能である。また、日本語の特徴的な構文・表現等に見られる一部の用法を除けば、限られた方法においては二格と中国語との対応関係を体系的に提示することも可能である。

(6)「日本語文法の史的な研究と日本語教育との接点 関西方言のウ音便と話し言葉におけるイ形容詞の工段長音を例に」:本論文は日本語史における「才段長音化」と「工段長音化」と呼ばれる現象を例に、日本語史の知識が現代日本語の学習に活用できることを論じたものである。日本語史の通時的観点を部分的に取り入れ、その部分的な古典語の知識を有効に利用すれば、本論文で言及したような一部の文法現象または文法項目そのものを、より体系的に捉えることができる。そのような知識を学ぶことは学習負担の軽減にもつながる効果があると考えられる。日本語学習者にとって文法事項を学習するだけでなく、本論文の提示したような説明内容は日本語そのものに対する理解を深めることにもなる。例えば、古典語・古めかしい表現・固有名詞・一般名詞の語彙等においては表記と実際の読みが異なる場合が多々見られる。本論文のような視点をもって理解すれば学習者は日頃から積もりに積もった一部のモヤモヤ感を解消することができよう。これは日本語に対する学習意欲の向上にもつながり得る。

(7)「日本語教育の立場から垣間見たラ行音撥音化 日本語学習者の視点から」:現代日本語におけるンを伴う表現は実に種々雑多である。本論文は、実生活では日々耳にするものの、日本語教材には取り上げられることがほとんどなかった言語現象であるラ行音撥音に注目して考察を行った。音声学や音韻論における専門用語を可能な限り避け、日本語学習者にとって分かりやすい学習ルールを提案することがその目的である。具体的には、まず、マスメディアを中心に集めた用例をもって、ラ行音撥音の全体像を明らかにした。続いて、筆者自身が来日以来、記録してきた学習メモに基づいて、ラ行音撥音の中で、学習者にとって難点と考えられる箇所を示した。そして、以上の点を踏まえた上で、ラ行音に由来する撥音を体系的に理解する学習ルールを提案した。また、近畿方言を含む「標準語」を学習する際に、上記のルールが援用できる可能性についても言及した。日本語学と日本語教育が「別居」状態にあると言われる中、日本語学習者の視点を重視し、いわゆる標準語に限定せず、方言を視野に入れて学習する必要性、また、通時的観点を部分的に取り入れることがより効率的な現代語の学習に繋が

る可能性を、「越境する日本語」という枠組みで捉えたものである。

(8)「撥音は解析システムにとっても簡単ではなかったんだ BCCWJを中心に」: 本論文は、解析システムにとって判定が難しかった撥音のタイプに焦点を当てたものである。撥音を対象に現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)より用例抽出を行った結果、誤解析が非常に多いことがわかった。これは日本語において撥音を伴う表現が種々雑多であることに起因すると考えられる。難解とされる箇所は違うものの、撥音を伴う多種多様な表現形式の理解は日本語を母語としない学習者にとってだけでなく、解析システムにとっても簡単ではないと言えよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計8件)

劉志偉、「撥音は解析システムにとっても簡単ではなかったんだ BCCWJを中心に」『埼玉大学紀要(教養学部)』54-2、pp.175-200、査読なし、埼玉大学教養学部、2019年3月

劉志偉、「日本語教育の立場から垣間見たラ行音撥音化 日本語学習者の視点から」『埼玉大学紀要(教養学部)』54-1、pp.121-135、査読なし、埼玉大学教養学部、2018年9月

劉志偉、「二格名詞句に関する一考察 日中対照研究の見地から」庵功雄・杉村泰・建石始・中俣尚己・劉志偉編『中国語話者のための日本語教育文法を求めて』、pp.15-29、査読なし、日中言語文化出版社、2017年11月

劉志偉、「新しい日本語教育のアクセント学習において必要なもの 中国人日本語学習者の学習メモの分析から」『言語の研究』第3号、pp.31-43、査読あり、首都大学東京言語研究会、2017年7月

劉志偉、「ニア・ネイティブレベルを目指すためのカタカナ語学習に関する一考察 中国語話者のケーススタディーを通して」『高橋弥守彦教授古稀記念論文集』、pp.264-279、査読なし、国際連語論学会、2017年3月

劉志偉、「日本語文法の史的研究と日本語教育との接点 関西方言のウ音便と話し言葉におけるイ形容詞の工段長音を例に」『武蔵野大学日本文学研究所紀要』第4号、pp.65-74、査読あり、武蔵野大学日本文学研究所、2017年3月

劉志偉、「学習経験者の視点から見た立体的な語彙学習について 中国語話者の個人学習メモを手がかりに」『人文学報』513-7、pp.1-17、査読なし、首都大学東京人文科学研究科、2017年3月

劉志偉、「第5章 日本語学習者から見た語彙シラバス」森篤嗣編『ニーズを踏まえた語彙シラバス』(現場に役立つ日本語教育研究シリーズ 第2巻) pp.95-114、査読なし、くろしお出版 2016年10月

〔学会発表〕(計6件)

劉志偉、「撥音(の解析)は機械(UniDic)にとっても簡単ではなかったんだ! - BCCWJを中心に -」、言語資源活用ワークショップ2018、2018年9月4日~5日、国立国語研究所(東京都・立川市)

劉志偉、「ハとガは本当に難しいのか 先行説を垣間見つつ」、第10回漢日対比語言研究会、2018年8月11日~12日、蘇州大学(中国・江蘇省蘇州市)

劉志偉、「日本語は学習者にどう映るのか」、埼玉大学教養学部リベラル・アーツ研究セミナー、2017年10月20日、埼玉大学(埼玉県・さいたま市)

劉志偉、「撥音便の周辺の形式を如何に捉えるか - ナ行音とマ行音に由来する表現形式を中心に -」、第9回漢日対比語言研究会、2017年8月19日~20日、北方工業大学(中国・北京市)

劉志偉、「撥音便の周辺形式について - ラ行音の撥音化に注目して - 」、第 11 回 OPI 国際大会、2017 年 8 月 4 日～5 日、淡水大学（台湾・台北市）

劉志偉、「バラエティー番組のテロップに見られるラ行音の音縮形について」、類型学研究会例会、2017 年 7 月 22 日、大阪大学豊中キャンパス（大阪府・豊中市）

〔その他〕(計 3 件)

劉志偉、「日本語は外国人にどう映るのか」『埼玉新聞』、2018 年 1 月 26 日

劉志偉、「日本語を学ぶ外国人の視点から日本語教育のあるべき姿を考える」埼玉大学広報誌『サイダイコンシェルジュ』26、p.5、2017 年 11 月

劉志偉、「川平ひとし著『中世和歌論』」『日本語 / 日本語教育研究』8、pp.254-256、日本語 / 日本語教育研究会、2017 年 6 月

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。